

巻 頭 言

教授 小林 裕明

平成 28 年 4 月 1 日付けで鹿児島大学産科婦人科学教室の教授を拝命しました小林です。永田行博前々教授、堂地勉前教授が築きあげてこられた教室を引き継がせて頂くことになったわけですが、光栄でありますとともにその責任の重さに身の引き締まる思いです。“換骨奪胎”という言葉は産婦人科医が使うには不適切な印象の言葉かもしれませんが、まさに両先生が築き上げてこられた立派な教室を土台に、更なる進歩を加えて発展させて行けたらと思っています。

さて例年、碩門会誌は 11 月頃発刊しておりましたが、前年の業績・行事をご報告することを考えますと春～初夏発刊が望ましいため、本年度号は数か月早めにお届けし、来年度からは 6 月頃までには発刊するように変更させていただきます。特に今春は、堂地勉教授と藤野敏則教授のご退任祝賀会がございましたので、本号を退任記念特集号とさせて頂き、昨年 11 月にお伝えしたばかりの“関連病院便り”、“研究室報告”、“教室便り”は省いて来年度号から通常通りに記載させて頂くこととしました。医局長はじめ編集に関わった教室の皆さんには負担をかけましたが、本号を退任記念特集号として、堂地先生と藤野先生からのお言葉に加え、祝賀会の様子や同門の先生方から寄せられたご寄稿をお伝えするのは本当に嬉しい限りです。

新体制でスタートしてから慌ただしい毎日が過ぎるばかりで、教室の運営・将来についてゆっくり熟考できたわけではありませが、この“巻頭言”の場をお借りして私の思うところを皆様にお伝えさせていただきます。本号で割愛した“教室便り”を補う意味も含めて、教室の現状と今後の展望について書かせて頂きますので巻頭言としては異例の長さとなってしまうかもしれませんが、ご容赦いただけましたら幸いです。

1. 熊本地震義援金へのご協力に対する御礼

平素より同門の先生方には教室を物心両面で支えて頂き、この場を借りて深く御礼申し上げます。特に今年 4 月の熊本地震に対する義援金の協力依頼の際には迅速かつ多数のお振込みを頂き、本当に有難うございました。震災直後、碩門会・有馬直見会長と相談のうえ、まずは碩門会と教室が折半する形で 50 万円を立て替え、取り急ぎ日本産婦人科医会・日本産科婦人科学会の合同義援金窓口に振り込みました。それから皆様にご協力を依頼した訳ですが、なんとその倍額にあたる義援金が寄せられました（別頁にその結果報告とご

協力いただいた皆様のお名前を掲載しました)。有馬会長と再度相談のうえ、立て替えた分を超えて集まった 50 万円は、震災後中心となって産婦人科医療の回復に努められた熊本大学産婦人科教室に送らせていただきました。いずれも皆様には事後承諾の報告となって申し訳ありませんが、熊本大学片渕教授から碩門会の皆様へ深甚なる謝意をお伝えいただきたいのご丁寧な礼状を頂きました。

九州大学時代に講演に呼んで頂いた時から、鹿児島大学と同門の先生方との関係は素晴らしいと感じておりましたが、平成 24 年に鹿児島に来てからずっと教室と碩門会との親密な信頼関係に改めて感激することばかりです。永田先生と堂地先生が皆様と築いてこられた深い絆を継承させて頂けることは本当に有難いと、この義援金のことでも再認識した次第です。本当に有難うございました。

## 2. 臨床に関して

堂地教授が教室のみならず本邦の基礎を築いてこられた女性ヘルスケア（女性医学）の分野は、8 月から周産母子センターの准教授に就任した岩元一朗先生や崎濱ミカ先生を中心に展開していきます。産婦人科後期研修医が選択する 4 つ目のサブスペシャリティとして専門医機構にも近々認定されるでしょうから、今後ますます重要度を増していく分野だと思います。不妊内分泌の分野は今まで沖利通先生が献身的に長時間の外来をこなし、自ら体外受精の採卵や胚培養をして発展してきた分野ですが、4 月から保健学科の教授になられた今、後輩たちで継承していかなければなりません。外来専任の医員の中から中條有紀子先生と内田那津子先生、そして 9 月からは樋渡小百合先生にも引き継いでもらうこととし、現在、沖先生から指導を受けています。胚培養士も病院雇いとして公募できることになりそうですが、なかなか人材が見つかりません。同門の先生方のお知り合いで、経験をもつ方がおられたらぜひご紹介下さい。

周産期医療に関しては新谷光央病棟医長の専門である胎児心奇形の紹介患者が増えてきました。小児心臓手術がご専門の第 2 外科井本浩教授や小児外科の家入里志教授、そして今年 4 月から NICU を運営して下さることになった小児科の河野嘉文教授らのご協力も得て、今後当科産科医療の得意分野になっていくと思います。また、外科的介入を要する産後の出血ないしは感染性疾患も増えてきました。極小未熟児の救命も可能な NICU を有する鹿児島市立病院には切迫早産管理や胎児治療を有する紹介が集まるという分業化が進むかも知れませんが、当院 NICU が引き受けうる早産児の在胎週数も小児科の先生方のご尽力で徐々に早くなっていくでしょうから、切迫早産治療でも市立病院の後方支援ができればと考えています。学生・研修医たちが産婦人科に興味を持つきっかけの多くは“生命の誕生に立ち会える”ことです。産科のスタッフ達は人手不足で大変しょうが、私も手術症例などで最大限のバックアップをしていきますので、勧誘および後輩の指導を引き続き頑張ってください。

婦人科腫瘍分野はお陰様で多くのがん患者をご紹介いただき、最近、雑誌 AERA で報じ

られた“年間がん手術数の多い良い病院”の特集で当科は婦人科がんの分野で本邦上位 30 病院に選ばれ、九州で 1 位、子宮頸癌の手術数では本邦 6 位でした。鹿児島大学の外科系で選ばれたのは当科だけでしたが、これだけ少ない主治医と執刀者数の当科が、多数のベッドを有する都心のがん専門病院などと肩を並べることができたのは驚きでした。ひとえに皆様の患者紹介と教室員の頑張りのおかげと、心より感謝しています。腹腔鏡体癌・頸癌の手術も国内でも有数の多さで、広汎子宮頸部摘出術やセンチネルノードナビゲーションサージャリーの医師主導臨床試験、国際・国内多施設共同臨床試験も少ない人数の腫瘍グループ（神尾真樹先生、戸上真一先生、福田美香先生）で取り組んでいます。また、他県にかなりの遅れを取りましたが 12 月にはようやく当学にもダヴィンチ（最新機種 of Xi）が納品されますので、急いで先進医療申請に向けてロボット広汎子宮全摘術の症例を重ねたいと思っています。

### 3. 研究に関して

教室員不足のあおりを最も受けている分野です。研究あってこそその大学ですので、教室員が増えるまでは臨床のシーズをうまく使った研究で展開していかなければならないと思っています。堂地先生は時間があればパソコンに向かわれ、アツという間に欧文論文を書き上げておられました。お忙しい教授職の中、教室の英語論文業績のほとんどに自ら関わられておりましたが、私にはとてもそのような才覚はありませんので、教室員を叱咤激励して論文を自分で書いてもらい、それを校正する立場に徹したいと思っています。就任後に行った教室員面接で、若手・中堅・指導者とそれぞれの立場に応じた年間執筆予定論文タイトルを提出してもらうようお願いしました。若手のうちは和文の症例報告でも良いので、ぜひ毎年論文を書く習慣を身に付けてもらいたいと思います。中堅以上は欧文論文に加えて研究費を獲得することも要請しています。

研究費はあっても基礎研究は大学院生がいないと発展しないものです。一刻も早く教室員を増やして「基礎大学院に進みたい！」と、自分の希望が遠慮なく言える日を迎えないといけません。今春、研究棟を改装して遺伝子操作もできる P2 レベルの実験室を完成させました。現在、教室員たちは臨床で忙しく、夜になっても病棟から研究棟に戻ってこられる先生はほとんどいません。夜の研究棟はほぼ私一人で寂しい限りですが、大学院生や研究生が増えて P2 実験室を中心に若い研究者同士が語り合う研究棟になってくれればと願っています。

### 4. 教育に関して

医育機関である大学で決しておざなりにできないし、入局勧誘にも関わる大事な分野です。2 年生の自主研究の選択科目では今後の医師にとって大事な外国語能力を高めるための欧文テキスト和訳に加えて、産婦人科医を描いた今人気の漫画“コウノドリ”を一話ずつ読んでもらって、指導教官ともにその症例について討論することで産婦人科への興味を高

めようという授業を始めました。その授業プランを各科オリエンテーションで説明したところ好評を得て、本年度は員定 3 名に対して 9 名の応募がありました。将来のクリニカルクラークシップ選択につながってくれればと思います。4 年生の学部講義では、多大な負担となりますが非常勤講師の先生方にもご協力いただき、例年の医師国家試験問題を意識した講義スライドを作成して頂きました。各自のスライドを事前提出して頂き、講義担当者全員で共有することで講義内容の重複や欠落が無いように努めました。講義にどれくらい熱意と時間をかけて準備しているかを学生たちは敏感に感じとっています。それは産婦人科学に興味を持つか否かはもちろん、入局勧誘にも直結しますので、今後ともご協力をお願いします。5 年生のベッドサイドでは当科の医師たちが忙しいながらも仲良く楽しく働いていることをアピールすることに力を入れています。手術中も回診中も 5 年生に語り掛けることを重視してきましたが、教室員の皆さんも忙しいのにもかかわらず、本当に良く学生を指導し交流してくれました。これらのおかげか、平成 26 年度は 2 名しか選択してくれなかった 6 年生のクリニカルクラークシップも 27 年度は 12 名、28 年度は 11 名が当科を選んでくれました。4 ヶ月のクリニカルクラークシップ期間中、たった 1 ないしは 2 か月しか外科系診療科を選べないなか、外科系診療科の中で 1-2 位を争う数の 6 年生が当科を選んでくれました。平成 27 年度に来てくれた 12 名が入局を決めるのは再来年ですが、一人でも多くの教室員が誕生してくれればと心より願っています。入局後の初期・後期研修に関しては、主治医数が少ない分、集学的医療を要する勉強になる症例をたくさん経験できていると思います。そのためか、鹿児島大学産婦人科に異動後、私が強く感じたことは、他大学の同年の医師たちより遥かに高い臨床力を身につけうる環境にあるということです。同門の皆様からご紹介いただく豊富な症例を背景に、今後もこの環境を維持していきたいと思えます。

##### 5. 新専攻医プログラムに関して

来年度開始予定であった日本専門医機構による新専攻医プログラムは見送られ、平成 29 年度は、各基幹施設で作成・提出していた同プログラムを日本産科婦人科学会主導のプログラムに修正し、連携施設と共に開始することが決まりました。平成 30 年度からは間違いなく日本専門医機構による新専攻医プログラムが始まる訳ですが、それが地方の産婦人科医増加につながるかは全く未知数です。すくなくとも“鹿児島の産婦人科研修は充実しているし、専門医になっても素晴らしい次のサブスペシャリティ研修ができる”と感じて鹿児島県のプログラムを選んでいただくことが重要ですので、鹿児島市立病院産婦人科の上塘正人部長にご相談して、大学同様、基幹施設の申請をしていただきました。その結果、鹿児島県の産婦人科プログラムは 2 つの基幹施設からなり、かつお互いが相手の連携施設でもありますので、強固な協力体制のもと大きな裾野をもった研修施設の集団（ネットワーク）を形成することができました。もちろん、専門医取得後もお互いの病院を行き来するサブスペシャリティ研修も可能としましたので、“オール鹿児島”で産婦人科医を増やす

体制ができつつあると思います。

また、一度は東京や横浜で働いてみたいという思いから関東で研修し、帰鹿しづらくなってそのままそこに留まってしまう郷里の若手医師が多い現状を憂い、今回、聖路加病院および横浜市立大学病院に当教室の連携施設となって頂くことを打診しました。いずれからも快諾頂き、先方からも当教室に研修医を送りたいとのご返事をいただきました。当教室の後期研修医たちが当教室を母艦として旅立って都会の生活を堪能した後は、願わくば、“良い研修できるか否かは本人のやる気次第で都会も地方も変わらないこと”、“むしろ鹿児島の方が患者さんが医者を大事にして下さる環境であること”などを感じ取って、あの人工衛星“はやぶさ”のように教室まで帰還してもらおうと願って行く挑戦的試みです。

以上のように、このプログラムを選択してくれた後期研修医たちは、自由かつ柔軟ながらも充実した研修システムのなか産婦人科専門医を取得していくこととなります。若き産婦人科医が増えることこそが今後の鹿児島の産婦人科医療を維持・発展させていくわけですので、一人でも多くの初期研修医が鹿児島県の産婦人科専門医プログラムを選択してくれることを願っています。

## 6. 入局勧誘に関して

本年度は、本誌に自己紹介を書いてくれた田畑亜希子先生、下大藺文野先生、福岡美咲先生に加えて、9月より大田俊一郎先生が入局して下さることになり、4人入局の年となりました。大田先生は平成3年に久留米大学産婦人科に入局され、医学博士取得、海外留学後、久留米大学の講師や医局長を経て、平成25年からは熊本市民病院の産婦人科部長として勤務されていました。臨床細胞学会細胞診指導医、婦人科腫瘍専門医、女性ヘルスケア暫定指導医でもあるベテランの先生で、私も良く存じ上げている後輩の指導にも熱心な素晴らしい先生です。皆さんご存知のように今回、震災のため熊本市民病院は立て直しが必要となり、少なくとも3年間は閉院することになりました。ベテランである大田先生が婦人科がん診療に携われる相応のポストが、たまたま久留米大学関連施設に無かったこともあり、久留米大学牛嶋公生教授にお願い申し上げ、鹿児島医療センターに勤務して頂くことのお許しを得ました。9月から当教室に入局して頂いたうえで学外出張して頂きますが、築詰伸太郎先生とともに婦人科がん診療を中心に大いに活躍して下さることと思います。今後、地方学会や同門会などで碩門会の皆様との交流が始まると思いますが、何卒宜しくお願いします。

マンパワーがなければ研究費がいくらあっても何もできません。逆にマンパワーさえあれば今の医師不足の産婦人科の世界では何でも実現可能です。10年後の産婦人科医師数の県別予測で、残念ながら鹿児島県は1割以上減るであろうと予測された11県の中に入っています。特に鹿児島市外における産婦人科医の減少は深刻で、産科医一人当たりが取り上げているお産の数は全国平均の2から4倍と過酷です。よって、鹿児島県の産婦人科医師を増やすことは喫緊の課題です。当教室に与えられた使命の一つは、一人でも多くの入局

者を募り、指導育成し、県内の各施設で活躍して頂く人材を輩出することだと思っています。平成 28 年度からは“はやぶさプラン”という医師・助産師・看護師不足対策基金が創設されましたが、有難いことに当教室入局者を対象に助成を頂けることとなりました。このように地方挙げて産婦人科医を増やそうという機運は高まっています。産婦人科の学問・医療としてのやりがいと面白さは、体験すれば必ずわかって頂けると思いますので、もし先生方の周りに産婦人科に興味を持っている学生や研修医がおられましたらぜひお教え下さい。どこでもいつでも勧誘に出向きたいと思っておりますし、実際に教室を見学してもらいたいと思っております。

おわりに

以上、教室の現状の報告と今後の抱負を述べさせて頂きました。まだまだ未熟者ですので、碩門会の先生方にはいろいろご教示頂くことが多いかと存じます。どうぞ忌憚なきご意見、ご提言を賜れば幸いです。教室員さえ増えれば、医師不足の総合病院に産婦人科医を派遣することで、その周辺のご開業の先生方の負担を軽減できるはずですし、さらに基礎研究を行う大学院生も増えていく時代を迎えることができるでしょう。ご開業の先生方の中には診療のパートナーや後継者を探しておられる方も多いと思いますが、自院への教室員勧誘は今しばらく我慢して頂いて、まずは教室員数が増えることにご賛同・ご協力頂ければ幸いです。我々も一刻も早く教室員が十分な数となるよう勧誘・指導に最善を尽くして参ります。その時はご開業の先生方のパートナーとして教室員をご紹介できる時代も来ると思っておりますので、ご理解のほどお願い申し上げます。今後とも末永く、鹿児島大学産科婦人科学教室をご指導ご支援ください。宜しくお願いします。